

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【虚構からの訣別を図るべき時期に到達したJR東日本！ シリーズ15】

JR東日本経営陣への提言 **虚構からの訣別の勇気を！その**

・・・そして後者は、かつて組合側（＝松崎氏）の不当な中止要求に屈した「リーダー研修」の再開である。ともかく、正しいことに対する正常な感覚、企業として守らなければならないものは断固守り抜く“気概”を回復することである。要は、このように記録されたことを“屈辱”と感ずる精神を取り戻すことである。

リーダー研修のときも「会社に対する動かぬ証拠」を求めて毎晩検討はしていた。しかし証拠など出てこない。そんなとき（松崎）顧問は、「リーダー研修はマル生だ、中止しろ。証拠？俺はプロだ、ごまかすんじゃない」ということで会社に迫った。

<松崎明編著『仇花と崇高な心』411ページ（JR東労組本部資料センター次長・林和美氏記述部分からの抜粋）>

なお、JR東日本の管理者教育にまつわる経営側の苦悩について筆者にひとつの思い出がある。福島県の白河周辺にあるJR東日本の教育施設の開所を翌春に控えた年末近くの頃、旧知のJR東日本本社の教育担当部門幹部から筆者に管理者教育の講師依頼があった。・・・意外にも「組合に堂々と物申せる管理者」を育成して貰いたいのだ、というのであった。それで上の方は大丈夫なの？と訊いたところ、「トップの強い希望です」と云う。いささか気分をよくして快諾し別れたところ、数日してその幹部から至急お会いしたいと連絡があり、気の毒なくらい云いにくそうな調子で、「申し訳ないが、あの話はなかったことにしていただきたい」と謝罪された。もともとおかしな話だったのだ。筆者が第一冊目の本を書くより数年前の話だが、それでも筆者の松崎批判、JR東日本革マル問題批判は相当広く知られていたはずなので、どこから横槍が入ったのだなと思い、その幹部の苦しい立場を察して多くを訊かずに承知した。

・・・ともあれ、先に一部のみを紹介した「問題意識と問題解決能力の高い人事・労務の担当者たち」の存在や、「組合幹部の横暴に屈しない支社長の勇気に歓喜した“支社中堅幹部と現場長たち有志”が密かに集合して祝杯をあげた」実例などが示すように、悪しきすべての根因である「JR東日本革マル問題」解決の気運は整い、漲っている。**残り、待たれているのは「トップの決断」のみである。トップの決断と勇気さえあれば、その成功は容易である。**“虚構”世界で生きることをあまりにも長く強いられてきたJR東日本経営幹部の人々の目にはまだ不透明な部分が残っているのであろう。しかし、JR発足してまもなく20年である。もう時間はない。今や、「満を持して見守っているマスコミ」の目の前で、「したたかな大塚体制」が、堂々と王道を歩みつつ、懸案の「JR東日本革マル問題」抜本解決に向けた一大戦略を展開され、成功裡に終了されんことを祈念し、心からのエールを送る。<平成17年12月5日記>

《国鉄改革の完成に向けて（宗形明著）210ページ～212ページより抜粋》